

大和郡山城とその城下町試論

黒板昌夫

一

郡山城は近世城郭として全国的に見ても有数のものであるが、更にその城下町が往時の惣構と町割をよく留め、しかも惣構の築造者が明らかな点、極めて貴重である。

これに加えて東大寺、興福寺、殊に大和に絶大な権力を振った興福寺、その寺領を基盤として中世末その被官が抬頭しながらも、遂には寺院勢力も被官から成り上った大名も織田豊臣両氏の権力に屈し、大和にも近世社会が出現した、この劃期的な歴史転換の象徴と見られる点、類稀な歴史的意義がある。高台の城址に立ち、北東、春日山、若草山を背景とする東大寺の大仏殿、興福寺の五重塔を眺めるとこの転変の様相を一望の内に看取することができる。即ち今では決して派手な存在ではないが、ひろく日本史の全般的立場から考えると、この郡山城址は大和において飛鳥、平城につづく有数の歴史記念物と言っても過言ではない。

この小篇もこの重要性に促され、その城や城下町について気のつくまま、思いつくまま、些か愚案を加えたものである。

× × ×

この郡山の歴史、特に中世末から近世初頭にかけては、多聞院日記が同時代の数々の事実を生々しく報告しているが、研究としては早く永島福太郎氏の「奈良文化の伝流」、近くは「郡山町史」「大和郡山市史」があり教えられるところが多い。これらに比べると余りにも陳腐ではあるが、私の蔵書に郡山の沿革を綴った一冊の写本がある。

楮紙、半紙判袋綴、墨付十六枚、粗末な表紙をつけた平凡な体裁で、外題に「郡山城主御代記」、内題に「和州郡山城主御代記」とあり、その内容は草創から松平○柳沢美濃守伊信○信濃の没年寛政四年三月五日○三までのもので、市史の史料集に収められている「大和郡山旧記」「郡山藩旧記第一」のうち、後者に近い。この種の著述は城下町ではよく見かけるものであるが、京都でも上下京の商人町の沿革書が繁簡各種ある。何れは好古家や有志者の編纂であろう。従って大綱を

掘むのに便利ではあるが、史料としては検討の余地もあるのが常である。

この本も郡山城の草創を明応二年小田切宮内とし、故意か偶然か簡井順慶には触れず、小田切氏の後に羽柴（豊臣）秀長を続ける。この点は前記二書も同様であるし、大和志も同様である。併しこういうありきたりの本にもその伝承や見聞を書き綴った内に特色がないではなく、この私の御代記に、一箇条看過できない点があるのでこれを中心として考察を進めて行き度いと思う。

二

小田切宮内の築城に筆を起し、羽柴秀長の入城（天正十三年九月）に及び、その築城の経過と材木入手に当っての怪奇談、家中屋敷割、大織冠のこと（多武峯の郡山移転と帰山）などを記したのち、次の興味ある箇条を掲げている。

一大手口本町西垣手北向此所広小路にて

制札東向にたつ本町八町の始也

と。そしてこれに続いて

一当町割大納言殿○羽柴秀長御代より十三町に極り申候。（下略）

と記している。

いま問題の箇条は暫く置いて後者を考えてみよう。

豊臣秀吉は天正十三年閏八月簡井順慶の子定次を伊賀上野へ移し、その跡に弟秀長を置いたが、郡山の城下町が秀長のとき十三町あった

ことは事実で、これは天正十六年五月四日の「郡山惣町分日記」春岳院永島福太郎氏編大和古文書集英所収文書、

奈良町、雑穀町、茶町、材木町、紺屋町、豆腐町、の十三町と本町の枝町鍛冶町の計十四町を挙げていることで証明される。この日記の性質は私にはよく判らないが、これらの町が恐らくそれぞれの富の比例によったものであろう、本町の一貫五百文を筆頭に、鍛冶町の三百文を最低として五群に分け、等差的に銭を抛出し、これを秀長の五貫文を始めとして側近や家老等に献金しているのである。恐らく何らかの特別の措置に対する礼銭を献上した、その出納簿であろう。何れにせよ天正十六年五月四日現在、郡山には十三町があり、これに枝町が一町存在したことが判る。これは郡山の沿革を考える上で最も基本的なことである。

さて次に立ち戻って最初の箇条を検討することにしたい。この箇条は次の様によまれる。

「一大手口は本町の西。垣手北向き。此所広小路にて、制札東向に立つ。本町は八町の始也。」

いま文の示す儘に考えてみよう。城の大手口は本町の西にある、即ち東面している。而して制札が東向きに立っているという。これは容易に理解できる。が「垣手北向」という。垣手とは見かけない語であるが、恐らく鍵手＝鍵の手、即ち直角になっていることであろう。そうだとすると大手口が東面とするのと合致しない。思うに垣手北向とは大手口の門の向きを示し、東西に走る本町の通の方角と直角になっ

明治初期諏訪湖開墾計画の歴史地理学的考察

山 本 正 一

はしがき

- (1) 筑摩県出願願末
- (2) 長野県願書採択と指令
 - 1 水利問題の経緯と解決
 - 2 願書添附書の整備出願
- (3) 起業願書の再検討
 - 1 内務省採択、七ヶ条再検討
 - 2 天竜下流民の非難と反対
 - 3 企業人の反論と開墾許可懇請
 - 4 内務省不採択不許可
- (4) 何牒不尽
 - 1 企業人の主張と要請
 - 2 再検分報告
 - 3 再三伺と稟照
 - 4 内務省不許可の達示

(5) 諏訪湖は現状保存

- 1 願書及び副書
- 2 開墾拒否の達示と指令
- 3 願書却下

結 論

はしがき

明治七年より諏訪湖の七〇％を干拓開墾せんとする大計画が始まり前後七回にわたり出願。遂にその成果を得ず十五年五月終止符が打たれたのである。

古島敏雄氏監修長野県政史によれば県は利害関係から故障のない事を条件としたので願出人は地元関係者と折衝し上諏訪、豊田、湊、中州、長地など諸村の賛成を得たが平野、川岸両村の了解を得られず十五年に至ってようやく故障なき承諾を得たのであるが干拓計画は不許可となった。

江戸ではこの本町にかの三町年寄が住んでいたことは人のよく知る通りである。従って本町は八町の始とは、城下町で最初に置かれ、これを基幹として町が出来上った、ということで、この種の本では寧ろ卒直な表現として受取るべきである。「八町」も一つの都市、町をその町数で総称、表現することは、例えば大坂の石山本願寺の寺内町が「寺内六町」などといわれ、やや趣は違うが京都の御所附近の町を「禁裏六町」と称していたこと、或は「山科七郷」などに徴し、また元禄十二年の大坂濫觴書一件に「元和二辰年大坂地割被仰付候、御外廓御取払之節、御城内八町内玉造り伏見坂町、笠屋町、東伊勢町等他所へ替地被仰付、同二月丁割出来、。下略」とあるのや、道頓堀沿いの町について「道頓堀川八丁之儀者、。中略。大和橋町、御前町、九郎右衛門町、久左衛門町、立慶町、吉左衛門町、湊町、宗右衛門町と相唱、水帳出来申候、右川八町水帳安井九兵衛奥印被仰付候」、とあるのも参考にすべく、この城下の町を町数によって呼称することもまたあり得べきことと解せられる。

併しこれを郡山に当てはめてみるとどうであらうか。先に述べたように秀長の時、遅くとも天正十六年五月四日には十三町が存し、枝町一町が設けられていた。秀長が郡山へ入城した天正十三年九月からこの十六年五月まで約二年八ヶ月。この間周知のように郡山城下町の繁栄を促進するために奈良の商売を圧迫したが、さりとてこの結果この比較的短い年月に城下町が膨張したとも考えられず、この十三町は秀長が城下町を創設した当初からの町数だったのであらう。且つまた郡

山の町は江戸時代に入り時と共に発展し町の規模が拡張されていったが、この十三町は草分けとしての格を保有していた。(この間の事情は郡山町史、大和郡山市史に詳らかである)これは江戸や京都における「古町」が草分けの特権を保持し、以後生成した町と区別されていたのと同様で、この時代としては通則的な考え方である。この十三町の重みは秀長の時代に最初「八町」が設置され、ついで「十三町」に拡張されたものではないことをも示すものである。御代記が、「当町割大納言殿御代より十三町に極り申候」といつているのは正しい。このように「八町」は「十三町」と抵触し、秀長時代のことではないことになる。

私は今までこの簡条の示す通りに構成した結果、この文章だけでは首尾一貫して矛盾なく成立し得ることを見てきたのである。ところがこれを現実面に当てはめると無理の生じて来ることも知ったのである。しかもこの簡条は主体者の名前も記していない。従って臭い物には蓋式にこの簡条を何処か別の町の記事の混入か、と見ることはたやすい。併しこれは逃避にも通ずる。厳然と存するものである以上、更に考えてみねばならぬ。この相齟齬する八町と十三町の間の何処かに接点はないか、更めて検討を加えたい。

この検討に当って先づ述べてをきたいのは次のことである。

- (1) 秀長の当初から十三町であったことから推して、八町を秀長以前の町と解する、ということである。

(2) 次に今まで私が八町と十三町を比較してきたのは、十三町の本町

即ち今日の本町が八町の本町でもあったと認めてのことであつた。

この簡条の文章は簡素ではあるが、またそれだけ恐らくこれによって何人も理解し得るポイントを含んでいたものと解せられ、そのポイントが十三町の本町であると認めたからである。併しこれは読む人によって別の感触を受けることであろう。この本町と十三町の本町とは別のものとすることも可能である。従つて私は別個説を強いて斥けようとは思わないが、これについては後ちに検討することとして、先づ両本町同一として出発し、この仮定の下で種々の条件が解釈し得るならばこれを正しとする、というようにしたい。

これらのことを前提として先づ現在の 本町の西、「五軒屋敷」に大手口を設定し、町数を「八町」とした場合どんな結果が生ずるか検討してみよう。

「八町」については次の様な構成を考えてみよう。(末尾図面参照)

即ち前述天正十六年五月四日の「郡山惣町分日記」と現状とを参照し、十三町から (1)本町 (2)魚塩町 (3)堺町 (4)蘭町 (5)奈良町 (6)雑穀町 (7)茶町 (8)綿町の八町を摘出する。

この構成をみると今井町以北に矩形状に無理なく納まる。而して五軒屋敷(三の丸)は城の大手正面を護る郭であり、こういう景観は前述の江戸城常盤橋門内、西丸大手外の西丸下(皇居前広場)によく看取され、城郭の縄張としてはよく用いられる手法である。そして本町の西——これは必ずしも真西と狭く考える必要はないが——に当つ

て、即ち五軒屋敷の東面に大手口を開くとすれば、実に典型的な近世的城下町が出現する。十三町から本町を軸として八町を摘出すること、これは恣意的な仮定かと反省する。併し合理的な町割が得られたことは注意すべく、これは偶然とは片付けられないと思う。着想が十三町の内に籠められていた一つの真実を探り当てたのではないかと思う。先に八町と十三町の本町を別個と見る可能性を挙げておいたが、かく別個に考えたとしても、究極のところはこの八町の町割に帰着すると思う。

この合理的な構成を前にして更めて現城下町を見るとそこに不合理な面のあることに気がつく。現大手門(柳御門)を中心として十三町全体のバランスを考えれば、傍例から推して本町は先づは今井町、次に柳町か堺町が格好のところである。現在のように本町と大手口がかげ離れてその間何等有機的な関係がない都市構成こそ寧ろ異例と思われてくる。また現大手門が城の大手正面の防衛区域たる「五軒屋敷」(三の丸)を殆ど素通りの動線上にあること自体も納得がいかない。五軒屋敷の東面にこそ大手門を構えるべきである。これらの不合理さは、十三町の城下町と城の構成こそ或る変革を受けたものではないか、ということを示す。

このように八町の構成を十三町の城下町の内にも求めると合理的に納め得ることが判った。ここに私は八町と十三町の接点を見出し得たと思うのである。即ち秀長より以前のある時、「八町」の区劃を持ち、その本町の西に大手口を開く城下町が先行して存在し、この町

割の伝承が御代記に収められたのであろう。そしてこの「八町」の城下町をそのまま基盤として南方へ拡張し十三町が形成された。これに伴い城下町全体としては「八町」時代からの、本町の西の大手口が北に偏在するに至り、或る時これを現在のように五軒屋敷の南西隅に移したのではあるまいか。本町を移転することは町の構成を変更することとなり、これは実際上不可能で、その儘旧位置に留めたのである。かく考えれば先に指摘した現大手門の位置の城の機能上の、また城下町の構成上の不合理さも解釈がつく。或る時、またどうしてか、これについては後に触れたい。

三

かく秀長以前に八町の城下町を設定し得るとしてこれは何時の状態か。後述の土豪郡山衆は無理とすれば、先づは筒井氏を考えなければなるまい。

そこで私は暫く御代記を離れ、別に郡山の沿革を概観し、筒井氏の城下を「八町」に擬し得るや否やを検討してみたい。

大和平野の北部と富雄川沿いの鳥見谷の境を南北に走る低い丘陵の南端は、郡山の市街で平野部に下るが、かかる地形は土豪によって城として利用されることは通例である。大乗院寺社雑事記文明十一年十月十二日の条に「自福住、筒井^{○順}大勢令発向郡山中城、在家共焼払」と見え、永正三年、細川政元の軍は沢蔵軒を將として大和に侵入し、沢蔵軒は郡山に陣し「郡山之城」「郡山城」を手中に入れている。

多聞院日記、永正三、八、三―二四 元亀元年六月には、松永久秀は「郡山へ打寄、散郷悉焼之」同、元亀元、六、一四 いて城を包囲している。これは城の存在の二、三の例であるが、この城に拠った土豪として郡山氏―郡山衆の郡山中殿、郡山辰巳殿、郡山向井殿などを挙げることができる。氏の名に位置関係の名辭を付けることは大和の他の諸氏にも例があり、恐らく嫡流を中心としてその方位の近傍に小城を築いていたことと察せられる。郡山氏は筒井氏の一族となっていたといわれるが、その動向についてはそれぞれの利害から或る時は一致し、或る時は背反し、郡山辰巳は超昇寺と共に松永久秀の大和進出を助けたとのことで興福寺からも恨まれ、筒井氏も快よく思はず、遂に筒井順慶に滅されている。

筒井順慶は迂余曲折の後、天正五年松永久秀の滅亡後、同八年十一月七日には織田信長から大和を一円存知すべしと命ぜられて大和に覇を唱えたが、同時に信長の一国一城政策によって伝世の筒井の平城は他の諸氏の城と共に破却され、大和で唯一つ残された郡山城へ移るように命ぜられた。

さて多聞院日記天正七年八月一日の条に「此間筒井へ多聞山^{久秀の多聞山城}の石を奈良中人夫ニ申付之運之云々、各迷惑之由也」とあり、翌九月十三日の条に「一、庵今日柱立了、番匠筒へ呼トテ善四郎ハ不来」と見える。順慶は多聞山城の廃材の石材を運んで石垣を築き、また建物を建てたのであるが、この筒井をどう解釈するか、地名と見るか、人名と見るか、人名と見てもこれから直ちに筒井氏が支城を郡山に築いたと見得るかは議論の分れるところで、順慶がその地位上昇に

伴って筒井より地の利の好い郡山に築城した、と判断するのも一の見解である。併しこれは翌八年彼が郡山へ移ったことに惹かれているかと思われる。彼が郡山へ移ったのは信長の命令であつて、信長が平地で防備上不利な筒井城を破却し、城地として遙に優れた郡山城を順慶に与えたのは勿論順慶を優遇した訳ではなく、結局は信長自身にとつて大和統制上有利な地点として郡山を選び、そこに順慶を置いたに過ぎない。人ときこそ変われその子定次が天正十三年秀吉によつて伊賀上野へ移されていることがこれを証明する。私は順慶と郡山の結び付きは信長の政策の産物であり、天正七年漸く自己の地位の確立を遂げようとしている順慶としては、父祖からの根拠地筒井の平城を強化することが焦眉の急だつたろうと解し、多聞山の石を運んだ先は筒井だつたと思う。多聞院日記天正八年四月十一日の条に「郡山一類ノ衆悉以八日ヨリ一七日当社参籠云々、上下百余人ト云々、」とあるのは、蓋し郡山衆が信長の近畿制覇、筒井順慶と信長の緊密化に不安となつた自分達一族の将来の好転をかけての春日神社参籠と思われ、かかる祈願をかけていること、また天正八年十一月十二日郡山へ入城した順慶が、同二十四日に郡山辰巳父子を矢田（郡山城を追われここへ移つていたのであらう）で生害させていることは、この郡山の地は、筒井氏が移るまでは曲りなりにも郡山一類の衆が占めていたことを示すものと思う。而して天正八年二月、郡山で京都から虎屋、ササヤが下つて勸進能を行っているのは、郡山衆のみならず、在家と記された郡山の聚落と合せ考えるべきであらう。

従つて信長がここだけは残すようにと命じた郡山城は土豪郡山氏の城だつた訳で、大和国支配を命ぜられ、これに移つた筒井氏はこれを大々的に改修せざるを得なかつたと思う。

順慶が与えられ、普請を加えた郡山城の位置、規模には適確な史料はない。併し一帯の地形から判断し、その城地は、この丘陵の先端に近い恐らく元来は一連の自然の谷だつたと思われる鰻堀や鶯池を城濠とし、その北方の高所つまりは現郡山城址の地帯に城を営んだことと推定される。恐らく郡山一類の衆の誰かの城館だつたのであらう。筒井平城の破却は既に天正八年八月に始つてゐる。十一月には順慶は郡山へ入城している。新しい郡山城の普請の経過は詳らかではないが、安土城の例から見ても、移転と着工は殆ど同時だつたろう。或は筒井城の破却と共に始つてゐたかも知れない。翌九年五月九日奈良中の番匠を悉く郡山へ召集していることは——このことは必ずしもこれ以前は番匠を召集しなかつた証左とはならないが——土木工事の進捗に伴う建物工事の盛行、その完成を急いだかに思わせ、同八月十九日明智光秀が検分——多聞院日記に「見舞」とはあるが——に來てゐるのは、恐らく城の土木工事を始め建物など少なくとも主要部の竣功を示すものであらう。全体的な仕上げに時日を要するのは城の常であり、翌十年二月になつても「群^郡山普請」は続行し、^{蓮成院記}天正十一年四月二十二日には近江への出陣に當つて「天主」を「俄ニ」造営することになり、引続き奈良から人夫と番匠を召集している。多聞院日記にはこれを「世上大事ト存歟」と評している。適切な批評と

思うが、こういう際に俄に天守を上げるといふことに天守完成期におけるその役割が看取され、同時にヨーロッパの城郭におけるキーブ keep, ドンジ ャン donjon——普通天守と訳されるが——との相違点も看取される。

閑話休題。天正八年六月十日多聞院英俊は十市氏の後室へ使をやるついでに途中「筒井市」で塩——堺方面からの入荷であろう——を買ってこさせている。筒井の城下聚落の状況を示すものとして興味がある。この市は筒井城の破却、順慶の郡山入城後も続き天正十年三月二十五日にも英俊は弥三を「筒井市」に下し買物を調べさせている。多聞院日記によると天正十二年二月から郡山市での物資購入の記事が見えてくる。個人の日記であるから、その記事には任意性が考えられ、また当然筆者の行動、見聞に限られる訳でこれだけから外部の事態の推移全般を判断することは慎重を要するが、日記面からは天正十一年末から十二年初頭にかけて郡山城下の整備も完了したかに感ぜられる。何れにせよ筒井氏の移転に伴い郡山でも市が立ち、天正十二年、十三年と多聞院日記には「郡山市」の盛んなさまが見え、特に天正十二年十一月九日の条に「児ノアコメ。相ノ織物出来了、郡山市ノ与一郎持来了、」とあるが如きは注目に値する。市は常設の町と併存し得るが残念ながら商人町の景況を伝える記述はない。そして奈良における古くからの商業活動を考慮に入れなければならないにしても、この頃の城下町経営一般を背景として、天正十五年京都で悪事を働き捕えられた易者便覧なる者は「順慶法師の時分郡山ニ住テ一段威勢ナリシ」

^{多聞院日記天正十五・十六・十五}とある記事を見ると、「郡山市」と相俟って城下の、相当の住民と活発さを持った聚落を想定せざるを得ない。そして御代記の「八町」の町割をこの聚落に重ね合はせることも許されよう。

御代記の著者が八町の主体者として筒井氏の名を入れてもよさそうに思うが、これは既に述べたようにこの本は筒井順慶の名に一切触れていないためであろう。

さて私は上来秀長以前のある八町の城下町を郡山十三町の北部に求め、これを筒井氏の城下の発展と結び付けてここにその城下町の復原を試みて来たが、最後に八町乃至十三町の城下町構成上の疑問を提出し、これを解釈することによって更に「八町」の存在を確かめたいと思う。

さて十三町、八町の内、北は本町、東は藺町、南は綿町、西は堺町で限られた区域、即ち新町と中町。これらは勿論十三町に見えない後の枝町であるが、この矩形形状の区域は大和郡山市史の「城と町割」によれば寛永頃には枝町として内町に編入されていたという。正保図は全町すべて町名を記入していないが、新町、中町に当る町割を画き「町家」と記入している。郡山の町割が条里制の遺構を利用したことは市史の図示するところであるが、この区域の町割はそれとは全然ずれている。

この枝町発生経過をどう解釈するか。位置の点から見れば街道筋に沿い、北部八町の区域の中央部に位するところに当初町が設定されず、後枝町として初めて町となったとは思議である。枝町以前は

何であったか。枝町の位置を見るに、この両町は暫くおき、古く前掲天正十六年五月四日の惣町分日記に見える鍛冶町を始めとして、江戸時代に形成された新紺屋町、矢田町、西奈良口町、南北大工町、洞泉寺町、豊臣氏時代に形成されたと称せられる車町等、何れも十三町の外縁部、恐らく田畑だったろうと思われるところに見出される。これに對し同格の枝町である新町、中町がいれば目抜きのところ、に設けられているのは何故か。四周の町々がこのため縮少したとは考えられず、しかも「大和郡山旧記」によると、新町は茶町の、中町は雜穀町の枝町であつて四周の町々の枝町ではない。このことは此処が四周の町々とは無関係な区域だったことを意味する。城下町で方形の区劃の場合四面の家の背戸に空閑地が生ずることはある。併しそれにしては広きに過ぎるし、それよりも他の町々が、通常背戸に空閑地が伴う方格制を採らず、道路沿いに細長く形成されているのに、どうしてここだけが方格制に類する矩形の町割を採り、背戸の空閑地を設けていたのか、不可解である。若しこれだけの空閑地があつたとすれば、藺町以東の町々を西へ寄せ、もっと合理的に町割をすることもできた筈である。しかも田畑だったとも考えられない。かく考えると元来町屋ではない、何か特別の用途を持った区域ではなかったか、という疑問が生ずる。

秀長の時から十三町に課せられていた伝馬廿三疋は町々で飼育されていたとのことであり、伝馬とは関係はない。南北の街道に沿うこの不審な区域は、恐らく公共的な場であつたことは容易に推察されると

して、元来どういう区域であつたろうか。以下推測を試みたい。

先づその位置が交通の便に恵まれていることから「郡山市」の跡ではなかったか、と考えてみよう。豊臣氏時代にも「郡山市」は榮え、天正廿年（文祿元年）六月十日に秀保が秀長入国以来の方針として、郡山の外に市を立てる事を禁じていることはよく知られており、十三町時代にも市が重要だったことを示しているが、江戸時代に入り藩の財政、経済生活の仕組みが変わり、市の機能が相対的に軽減するにつれて市の場所は町家地となり、やがて枝町の新町、中町が設けられ、街路沿いは境町が拡張されてきたものではあるまいか。

この推定は交通の便のよい空間ということに注目したもので、強いて言えば、太田道灌の江戸城の門前に市場が設けられていたことが参考となるかも知れない。従つて一つの解釈ではあるが、これを阻むかの如きものもある。それは塩町（魚塩町は江戸時代に塩町と魚町に分れ、塩町は西方に位する）と車町の蛭子神社である。町史は「以上の二社は郡山市の神として迎えられたと考えれば興味深いものもないではないが、現在迄の処では之を肯定せしむる様な資料が見当らない」と述べている。市とえび、す神社の景観は奈良市の南市によく見られ、これは全く稀有の遺例である。いま市の跡は輪郭を存しながらも民家で埋められているが、これと中町、新町を対比しつつ私も「郡山市」の傍証をえび、す神社に求めている内に町史の記述に行き當つた訳で、頼みとするえび、す神社が予想外なところに、しかも二ヶ所にあるとは。町史の説くようにいまのところこの両蛭子神社は市の証左と

はならないかも知れないが、神社の由緒は忘れられ、或は転化するともあり得る。二ヶ所あることは難解ではあるが、強いて言えば八町の内である塩町の蛭子神社周辺を簡井氏時代の「郡山市」とし、車町（枝町）の神社を豊臣氏十三町時代に移転した「郡山市」の市の神とすることも考えられる。車町には天正十九年十一月十五日付、「車町家持定之事」なる文書があり、これによると豊臣氏時代に枝町として成立していたことになるが、^{郡山町史}文中に「丁代」^{（可）}「五人組」の如き名辭が見え、或は家屋売買に伴う札銭のことが記され天正十九年としては一考を要しようし、全体の文章も江戸時代のものかと思う。従って豊臣氏時代の「郡山市」を後の車町の地に求めることは可能である。そして市廃止後それぞれが町家化したとも考えられる。かの空閑地とて市としての積極的な裏付けのない現在、この両蛭子神社を全く無視して市と決めることは躊躇せざるを得ない。

次に考えられることは、これを「広小路」に充てることである。

江戸で広小路と呼ばれるところは可成りあり、切絵図などによると、一貫して道幅の変らないもの、局部的な拡がりをもつものなど見受けられるが、上野の広小路、浅草雷門前の広小路、両国橋詰の広小路などは正しく広場である。江戸城の大手門前には、堀端の道路がそこだけ拡がった矩形状の広場があり、用語例で言えば広小路である。他の城でも大手前に広場のあることは珍らしくない。

本町の西に大手口があったことは先に述べたが、通りが大手口正面からずれることはむしろ常道であって、この西は真西と局限せず可成

り幅広く解し得るものであり、更に大手口が必ず広小路―広場の中央に開口しなければならぬ、というものでもない。こういう状況の下にこの空閑地と五軒屋敷を対照してみると、先きに本町との関係から五軒屋敷の東面に大手口を求めたのと無理なく合致する。従って私は、この空閑地を大手前の広小路、即ち広場と解する。

先きに「本町の西」といった漠然とした範囲であったが、これによって簡井氏の八町時代、即ち元来の大手口の位置を可成り局限して考えられるようになる。かく「八町」の「広小路」にあて得る空閑地が存することは、八町の区域設定の客観性を更に確実にするものと言わざるを得ない。

而してこの広場が密閉されていた訳はないので、堺町の、この広場の西側に当るところは当然広小路に含まれていたことになる。かくして略々一町半四方の広場を持つことになるが、八町の総面積から見るとその比重は大きい。この点考慮の余地がない訳ではないが、このような天正前半期の城下町の遺例は乏しく批判の基準がないことも事実で、末だ近世初期にあつては城下町もさることながら、その全体との釣合いより、城主の身を護ることが先決であり、大手前を警備し、敵を迎え撃つに足場のよい広場を必要としたと解し度い。

またこの結果堺町が狭小になることも否めない、この点懸念はあるが併しこれもまたあり得る姿としておきたい。

これを要約すれば、簡井氏の時、矩形状の城下町が城の大手口の東外、本町を中心として開発された。町数は八。而して秀長はこの既に

街区として定着していた城下町を利用しつつ、これを南へ拡張し十三町に拡大した、ということである。従って町名も簡井氏時代のものを継承した、と認めてよいと思う。^(註)簡井氏を伊賀へ追って新しい支配者のもと、十三町は秀長の新しい城下町として出発、ここに草分けの十三町の特権が新しく発生する基盤ができたのであろう。天正十六年五月鍛冶町が枝町として存することはこれを物語る。順慶時代の八町から秀長時代の十三町へ、これは両者の規模の差として当然ながら、町としては南方へ拡張した結果大口も本町もそれだけ十三町の北部に偏在することになったのである。

四

以上述べてきたように秀長は簡井氏の城下町を拡張したが、城郭にあっても当然大改修を加えた。夥しい石材を搬入し、根来寺の大門を曳いてきたことなど多聞院日記に見えるが、これは規模の拡張や防備の強化を考えなくては到底解釈がつかない。

例えば順慶の天主は俄の工事であり、時日もかかっているかと思われるが、現在の本丸の天守台はその石垣の手法から見て、その南側の附櫓址かと思われるところには後世の拙劣な補修はあるが、秀長の構築であろう。従って現状から順慶時代の縄張を想定することは困難である。現本丸は恐らく元来最高所だったと認められ簡井氏時代もここに主要部を置いたことであろうが、本丸の形態まで簡井氏のものかどうか判断のしようがない。従って五軒屋敷も、簡井氏時代のものと

することによって八町の位置を証明することは困難で、実際問題としては八町を成立させることによって五軒屋敷を簡井氏のものとする訳である。即ち丘陵上の主要部の大手面を覆うて低地に根小屋的な防衛区城を設けることは十分考えられるということである。ただ五軒屋敷の大きさ、正保図に見るが如き整正された形態の完成には秀長や江戸時代の手が加わっていることは言うまでもない。

次に本町の西にあった大口が何時、どうして現在の、正保図の位置に移されたかに答えねばならぬ。

さて五軒屋敷を軸として観察すると、先にも触れたように大手口柳御門がその南西隅にあるということは、町部から丘陵上の主要部へは最短距離の径路となり、日常生活には便利な反面、大手筋の防衛区域たる五軒屋敷を横切る必要がなくなり、その存在意義は著るしく減ずる。

秀長時代には次の増田長盛が造成した惣構は勿論ない。東正面の佐保川が第一線の、ついで長盛が流路をつけ変える以前の秋篠川が南に真直ぐ流れて第二線の防衛線を形成していた時には、九州征伐も未だ終っていない頃として大口の移転は防備上安全でないと考えられる。増田長盛の時として京都の惣構（御土居）と同じく惣構を設けた程であれば、五軒屋敷の防備機能は温存していたことであろう。徳川家康はこの城を寺院勢力は完全に後退してをり、且つ万一の場合大坂方に奪はれてその拠点となることを恐れてであろうか、関ヶ原役後これを破却

し代官を派遣するに止めている。この城が再び大名の居城になったのは元和の役後、元和元年水野勝成からである。

勝成が入部した時、城は相当荒廃していたらしく幕府がこの補修土木工事を担当しているが、その嫡子美作守は五軒屋敷のところに住んだ。元和五年松平忠明（寛永十六年姫路へ移る）代って入部、この時ここに家老五名を置いた。五軒屋敷の名は実はこの時以来のものである。この時正保図などに見るが如き形が完成したのであろう。

而して重要なことはこの忠明の時「二ノ丸」の屋形が建てられ、爾来この「二ノ丸」（現郡山高校）が城主の屋敷となったことである。江戸時代、大名が本丸の屋敷から二の丸など外部へ屋敷を移す傾向がひろく見られるが、これもその一例で、水野勝成のとき建てられた本丸の屋形は放置され延宝七年入部した松平氏の時大破したので撤去されている。この「二ノ丸」は堀を隔てて本丸の南にあり、南は鷺池の崖に沿い、五軒屋敷から大手の阪路を登ればその南側（左手）に位する。

併し正保図によれば、本丸の東、堀を隔てこれと橋梁で結びいま毘沙門郭と称せられる郭に「二之丸」と標示しており、前記「二ノ丸」には本多内記（寛永十六年姫路より移る）云々と記入されている。

これは郡山城の構成からみると当然である。恐らく城主の住居があるまま本多内記以後「二ノ丸」の称呼を此処へ移したのであろう。このように郭の名称が変更されることは他の城にも例のあることで、敢えて異とするには当たらない。ところで此処へ城主の居館が移されたこ

とで当初計画された郭の有機的な配置が崩れた。元来毘沙門郭（旧二之丸）東側の高い石垣は自然の崖を利用したものであり、この石垣の南北線は、本丸と毘沙門郭（旧二之丸）の南面に沿う東西方向の堀で切られてはいるが、もともと新二ノ丸内部の南北に通る高い崖に連っていたと判断され、いま大手の鉄門址から新二ノ丸に至る阪路はこの崖を登っているわけで、新二ノ丸のために造成されたものと思われる。

恐らく元来の構想は鉄門を入れば西正面に毘沙門郭（旧二之丸）の石垣と新二ノ丸の高い崖に突き当ることになっていたに違いない。新二之丸中、その崖の下の平地部（現高校グラウンド）は、恐らく所謂捨曲輪だったのであろう。しかもこの高所が城内主要部に入る路を俯瞰し得る防備の急所だったと認められる。従って登城路は鉄門から右手（北方）に折れて毘沙門郭（旧二之丸）の下の堀に沿って北進一庵丸（法印郭）の虎口に到達する。これは後世も大手の道だったが、当初は新二ノ丸への阪路はなく、これだけが城中へ入る本道だったのであろう。正保図によると一庵丸の渡櫓門（一庵丸門）、これは忠明の時伏見城から移建したものであるが、この門の内部には細長の枳形が置かれ防備嚴重だった。この枳形は門移建と共に忠明によって新たに増設されたものと思われ、普通高麗門のある位置に前述の渡櫓門があり、内部の渡櫓門のあるべきところに高麗門があるという変則型である。これは前面に高麗門を配置せず、枳形というより矩折に屈曲する通路の奥正面に渡櫓門を設けるといふ、秀長時代に溯り得る古式の虎口形式をそのまま温存し、その内部に新たに枳形を設けたためであ

る。かかる古式虎口は、安土城、名護屋城、筒井定次の伊賀上野城にも見られ、その渡櫓門を今に留める景観は姫路城菱の門に遺っている。つまりここは古い虎口形式と新しい枳形の新旧二形式が併存し、築城史上興味がある。枳形は既に撤去され、古式の虎口も惜しむらくは一部に石垣の積み替えがあつたりするが、なお古風な手法や巨石の面影を迎えることができる。而して高く北東に突出するこの一庵丸は展望もよくきき、大手の要衝、秀長の家老一庵法印が預つたのも宜なる哉である。

ところで先に述べた鉄門から新二ノ丸に至る阪路は、その間何の防備施設もないとは驚くべきことである。これでは万一の場合忽ち新二ノ丸は陥り、本丸の南側へ進出され、包囲されることになる。かくて一庵丸門を潜り、毘沙門郭（旧二之丸）に入り、更にこと本丸の間の深い堀にかけられた高い極楽橋（現在橋台を遺すのみであるが、本丸へ向つて登り勾配の橋が深い堀を横切つていた時は、稀に見る壯観だったに違いない）を渡つて初めて本丸に達する要害堅固さは全く無視されて終つた訳である。畢竟これも江戸時代における時勢の然らしむるところであらう。新二ノ丸の北面から直接本丸に橋梁（現在土堤道）がかけれ、本丸にとりつく所に御台所門が設けられていたが、その通路に当るところを中心として石垣は積み替えられている。その手法から見て元和より以前に溯り難く、その下方に連なる在来の古式の石垣と対照的な姿を示している。恐らく忠明の居館を新二ノ丸に設けた時に行われた補修工事であらう。もっとも橋梁の通路は恐らく元来は

本丸の搦手の役割を持っていたのかも知れない。

このように城主の住生活の利便が優先して郭本来の防備の役割が変更されて行く。しかも城下町は南方へ発展の傾向が強く、町全体から見れば大手口は秀長時代に比べると益々北偏の度合が強くなってくる。この傾向の内に大手口の移転を捉えるべきかと思う。忠明の時伏見城から城門を移し、柳門、桜門、鉄門、一庵丸門、西手門（搦手）としているが、大手門が見えないことも注意すべきである。

元和以後の城の整備は石垣工事を始め伏見城からの城門移築等全般的なものであつたようであるが、詳細は明らかではない。関ヶ原役當時は「渡辺水庵（勘兵衛）覚書」に徴し明らかに天守は健在だったが、恐らく廢城に當つてその他の諸施設と共に撤去されたのであらう。併し郭の土木的部分まで地均しされた訳ではない。これが当時の破却である。従つて全体の規模を始め天守台等各所に秀長時代の遺構を指摘できる。それにしても秀保の時、関白秀次が泊つた「御城之内山里」（駒井日記、文は三、三、二）はどこに求むべきであらうか。（推定の経緯は略すが、本丸の西、厩郭と緑郭かと思う）

さて全体のプランは秀長時代としても、部分的には新しい工作も加えられたことであらう。一庵丸門内部の細長の枳形は、先にも触れたように忠明の時、伏見城の城門がここに移されたのを機会に新設されたものであらう。私の主張する第二次大手門、即ち柳御門も伏見城から移建された。その渡櫓の石垣は秀長時代と認められ、元来北の桜門と並んで南の脇門だったのであらうが、枳形は一庵丸門枳形と同時の

工作かと思う。いま崩壊がひどいが、正保図等に見える五軒屋敷の石垣に施されている歪^{ひずみ}は、横矢構は秀長の頃既に開発されてはいたが、その整った形は江戸時代修補の産物であろう。古図には北東隅、稜堡状突出部の東側面南寄り、魚塩町の通よりも北に当って堀を横切り町に通ずる橋が画かれ、簡単に枳形もない全くの小門が城内五軒屋敷側に画かれている。非常口か通用門と思われ決して防備を備えた大門ではない。八町当時本町の西にあった大手口ではないが、凡その景観を偲ぶよすがとはなるであろう。

五

秀長の十三町城下町の素地を簡井氏の城下町に求めようとする考えは従来ともあったが、「郡山城主御代記」の一条にめぐり逢ってこの重要な城と城下町を私なりに考える機会を得たことは極めて愉快であった。併し文献史料が極めて乏しいため、私は構造乃至形態論によってその欠を補うとした。大方の納得を得られたかどうか。地誌のほんの僅か一条を生かそうとして晦渋且つ独善に陥ってはいないか。独善は出来るだけ避けようとした。その一端として今まで主たるテーマとなってきた「八町」について根本的な考察を披露してこの小篇を終り度いと思う。

その一つ。「本町八町の始也」という。若しこの「八町」の「八」が「ハ」の誤字だと見たらどうであろう。これは写本として起り得ることである。「本町ハ町の始也」とよみ、町は城下町全体を指すと解す

る。これでも意味は通る。そして「八町」は雲霧消散する。この考え方、ただ難を言えば「八」を「ハ」とすることによって今日の觀念で文章らしくはなるものの、反って整い過ぎて、昔の「てにをは」などの送り仮名は漢文体の影響で今日の文法通りには拘泥しない文章、特に全体に簡素なこの箇条の文体と合わない気もするがどうであろう。また意味は通っても「八」は「ハ」の誤でなければならぬ根拠はない。元来こういう觀察は写本に接する場合必要ないことは言うまでもないが、自ら限度はある。有力な反証が出るとか、原文ではどうしても通じ兼ねるという場合にはじめて解決の糸口を与えようということである。「八町」は私なりに解釈の努力を尽した。自問自答、敢えてハ↓ハ誤字を採らなかつた所以である。

そのもう一つ。「八町」の「八」は美称、実際の数字ではないと見ることである。これは古典には屢々見られるが、信長公記卷十三 天正八年条にも、石山本願寺の広大な景観を「方八町に相構へ」と叙している。この辺は美文調のところで正しく形容語である。この語は土塁で囲まれた方形状の広大な区域を形容するためにひろく使われており、胆沢城址や平城宮址の「方八町」、周防国衙址の「土居八町」はこの二、三の例である。江戸で「八百八町」といわれるのもいうまでもなくこれと同じ心理である。併し御代記に至っては冒頭に引用した通り、一貫して町の状態の、まるで電文のような、そっけない迄にドライな客観的描写であり、また実態を示す目的の著述でもある訳で、誇張や美文の痕跡はない。「八町」を実数と見、ここでもこれを生かした所以で

ある。

註 郡山の秀長の城下町の淵源を筒井氏の城下に求める推定は、既に永島福太郎氏の「奈良文化の伝流」、「郡山町史」等によって試みられている。

郡山町史は「これら十三町の成立については詳しい事はわからないが、順慶時代にすでに成立していた町、秀長時代になって新しく経営されたものがある。名称の上から見て本町は最初の町造りによるもの」と述べ、また「この頃の郡山市で塩、木綿、魚等が売買せられた事と後の郡山町内の丁名とに何等かの連関あるを思わせられる。本町、塩町の辺は初期以来の町並である。名称から考えて本町筋が一番古いのは当然で、これを西へ延長すれば本丸に通ずる事は、初期の単純な城郭と城下町との関係を説明するものであろうか。」と注意すべき見解を示している。市の商品を通じてその需要の多いことが窺われ、これが店舗―町の形成、営業種目に影響のあることは理解できる。本丸に通ずることよりも寧ろ城と城下の接点たる大手口に注意すべきだったと思うが、城の構成と結び付けようとする着眼は評価すべきものと思う。

本文を繰り返すようであるが、本町を八町と十三町に共通のものとして出発し、八町を母胎として十三町が形成され、また大手口の位置も秀長は筒井氏時代を継承したと見る立場から、八町の町名も当然継承されたと考えざるを得ない。

なお本町や日常品を扱う町と並んで奈良町と堺町は地名を冠する。

奈良町は順慶の地位や商人の動きから見て奈良の商人を招いたとするとは可能である。問題は堺町である。堺町の名は堺商人移住の町と見るのが常識であろう。当時筒井順慶が堺に対してどれだけ力を及ぼし得たかは検討すべきであろうが、いまは大和における強力な地位の確立を背景として、城下町新宮のために資力の大きい奈良と堺の商人を利用したと考え

たい。多聞院日記を見ても、堺から薬を購入してをり、堺との間の取引の活潑さの一端を伺うことができ、堺商人移住の可能性も考えられる。

而して堺町が、城下を通過する街道、これは城下を出ると、江戸時代の古図に徴し紀州街道である「高野海道」と「堺海道」に分れたろうが、この街道の街路に沿っていたことは興味がある。これは大坂の、堺商人のいた北浜堺町と堺丁筋、堺筋と対比して更に考えてみる必要がある。

補註 文中に触れた正保図は、日本城郭協会刊行の和州郡山城絵図に拠る。

(本学教授・国史学)

